

意味と理解——後期ヴィトゲンシュタイン解釈のために

(氏名) 丸田 健

(所属) 奈良大学

ヴィトゲンシュタインの後期代表作『哲学探究』の第二部の位置付けは、長らく困惑の種だった。遺稿 TS234 は、当初の遺稿管理人三人のうち、編者となったアンスコムとリース二人の判断でブラックウェル版『探究』に加えられ、その書の「第二部」の名前を与えられることになった。第二部の内容は一般的に「心理学の哲学」と表され、心理的諸体験に関する議論が目立つ。もしヴィトゲンシュタインが自らの手で『探究』を出版できていたなら、彼は第一部となった原稿 TS227 の後半に変更を加え、そこに TS234 の内容を組み込んだだろうというのが編者たちの憶測であった。しかしもう一人の遺稿管理人フォン・ウリクトは後に、「第一部は完全な著作」であり、第二部は「いくつかの点で新しい方向への出発を表している」という考えを示した。その後の研究の結果、問題の TS234 は『探究』とは独立の原稿と見なされることになり、『探究』は第四版からは新しい編者の下、旧第一部のみを『探究』とし、TS234 は「心理学の哲学——断片」という新しい名でいわば付録として残ることになった。

旧第一部と旧第二部には印象の違いがあり、それは通常、前者は前期思考を粉砕する実践的な言語観を示すことに努力を傾けるのに対し、後者では意味体験やアスペクト体験といった心理的体験をめぐる特殊なテーマの考察が顕著である、という仕方で説明されよう。フォン・ウリクトは、『探究』の旧第一部と旧第二部の「ギャップをつなぐ (bridging the gap)」手掛かりは、『断片 (Zettel)』——『探究』旧第一部と旧第二部にまたがる時期のタイプ原稿からの切り抜きのストック——にあるという可能性を指摘している。しかし他方、旧第二部にあるテーマは、旧第一部の完成後、新たな方向への出発として浮上したのではなく、1930年代からヴィトゲンシュタインの関心にあつたことを指摘する論者もいる (特に ter Hark)。もし後者の見方に従うなら、旧第一部・第二部の「ギャップをつなぐ」手掛かりは、『断片』よりずっと早い時期に見つけうることになるだろう。この見方はまだ十分に浸透しているとは思えない。本発表ではこの見方に与し、その読みの更なる可能性を提起するため、『探究』に先行する時期の出版物を——特に意味体験周辺に照準を当てつつ——参照し、ヴィトゲンシュタインの思考を追う。

結論めいたことを述べておこなうなら、哲学復帰以降、新たな言語理解に向けてヴィトゲンシュタインを動かし続けた「言葉の意味・理解とは何か」の関心は、意味体験へのアンビバレントな関心にもつながっている。意味に関する体験は『論考』的言語観では表現できない体験であり、その体験を受け入れ、他の心理的体験とも関連させつつ描写することは、新たな言語観での我々の意味理解、言語理解を成熟させるだろう。後期哲学の眼目が前期の言語観

からの脱却だとすると、『探究』旧第一部・第二部はその方向において連続・一体であり、両者にギャップの印象があるとなれば、それは『探究』以前に遡ることで解消できる可能性がある。